



「伯母はもうじきに降りてまいります、ナトル様」落ち着きはらった十五歳くらいの少女が言った。「それまではわたくしのようなもののお相手をしていただくかねばなりませんけど」

フラムトン・ナトルは、後から来る伯母と、目の前にいる姪と、どちらも軽んじてはいないということを理解してもらえよう努めなければならなくなった。内心では、こうやってあちこち訪問することが自分の神経症の回復に役立つものなのか、ますます疑わしくなってきた。

「目に見えてるわ」彼の姉は、転地療養の準備をする彼に言ったものだ。「生きた死体みたいに引きこもって、話し相手もなくふさぎこんで、かえって悪くするのが落ちよ。あちらで知り合った皆さまに紹介状を書いてあげます。それなりに良い人たちもいましたから」

フラムトンは、いまこうして面会を求めたサプルトン夫人が、はたして良い人の部類に入るのかどうかと考えていた。

「このあたりには、よほどお知り合いがいらっしゃるの？」沈黙が不自然にならない頃合をうまく見計らって、姪が尋ねた。

「それがまったく」フラムトンは言った。「姉が以前にこちらの牧師館でお世話になりまして、ええと、四年前でしたか、それで皆さんへの紹介状を書いてくれたんです」

最後のほうは、はっきりと遺憾の意を込めた感じの口調だ。

「なら、伯母との面識はございませんのね？」少女は念を押した。

「お名前とお所だけですが」なにせサプルトン夫人が既婚なのか未亡人なのかも知らない。家にはどことなく男性の生活感があるようなないような。

「伯母は三年前、恐ろしい悲劇に見舞われました」と、少女が言った。「お姉様がお発ちの後ですわね」

「悲劇ですって？」フラムトンは聞き返した。こんなのだかな田舎で悲劇など、あまりにも縁遠いように思えた。

「十月の午後というのにあのように窓を開けはなして、さぞご不審でしょう」と、姪の指し示すとおりに、庭に面した大きなフランス窓が開いている。

「時期のわりに少し暖かいですから」フラムトンはそう言って、「あの窓が、おっしゃる悲劇となにか関係するのですか？」

「三年前の今日、伯父と、伯母の二人の弟が、あの窓から狩りに出ていきました。そしてそれっきり帰ってきませんでした。お気に入りの狩り場に行く途中の沼地に呑み込まれてしまったのです。その年の夏は雨が多く降ったので、ふだん安全だったところが、深くまでぬかるんでいたのでしょうか。三人とも見つかりませんでした。しかも、それは不幸の始まりでしかなかったのです」

ここで少女は声をひそめ、冷静だった口ぶりがにわかには人間味を帯びた。

「気の毒な伯母は、三人が、連れていった茶色のスパニエルと一緒に、あの窓越しに帰ってくるものと信じきっています。そのために、暗くなるまで窓を開けておくのです。伯母はよくわたくしに、伯父たちがどういうふうに出ていったか話します。伯父は白いレインコートを手を持っていったとか、伯母の弟の口ニーは伯母が嫌がる『パーティ、どうしてお前は跳ねるんだ』を歌ってからかったとか。ですから今日のように静かな夕方になると、わたくしまであの窓から三人が――」

少女は震えて言葉を切った。伯母が遅れたことの非礼を詫びながら部屋に入ってきた。

「ベラでお相手ができましたかしら？」と、夫人。

「とても興味深いお話をうかがいました」フラムトンは応じた。

「窓を開けたままですけれど、どうぞお気になさらずに」サプルトン夫人は陽気に言う。「夫と弟たちが狩りから帰るたびにあの窓を使うんですの。沼地から帰ってきたら敷物が台なしになってしまいますわね。殿方というのは、どなたもそういうところがございませう？」

夫人は狩りのことや渡り鳥の減少、冬の鴨料理の準備などについて話しはじめた。フラムトンはいえぼうすら寒いものを感じるばかり。どうにか話題をそらそうとは努めたが、あまりうまくいかない。夫人の視線は彼と話している最中も彼を通り越し、開いた窓や庭のほうをちらちら見ている。なんだってこんな日に訪れてしまったのだろうと思った。

「医者たちが言うには、僕には完全な休養が必要なんだそうで、興奮せず、激しい運動も避けるようにと」フラムトンは言った。彼は彼で、会う人会う人がみな自分の病気や、その原因や、治療のしかたに興味を持つだろうという、わりとありがちな妄想に悩まされているのだ。「まあ食生活に関する意見は一致していないのですが」などと続ける。

「そうなんですか？」最後のほうはあくびを噛み殺したような調子で応じていたサプルトン夫人が、いきなり顔を輝かせた――しかし、フラムトンの言葉に反応したものではなかった。

「ああ、間に合いましたわ」と夫人は叫んだ。「お茶の時間にぴったり。まあ、あんなに、眼のなかまで泥だらけじゃない！」

フラムトンは同情と理解を込めたまなざしで姪のほうを見やった。しかし少女は恐怖に震えた目で開いた窓のほうを見つめている。得体の知れない恐怖とともに、彼も窓へと向きなおった。

深い夕暮れのなかから現われた三つの人影が、窓のほうへ庭を横切ってきた。みな銃を担ぎ、しかもそのうちのひとりには白いコートをかけていた。疲れた様子の茶色いスパニエルが従っていた。彼らは音もなく静かに近付いてきたが、しゃがれた若い声が「パーティ、どうしてお前は跳ねるんだ」と歌い出した。

フラムトンは杖と帽子を乱暴につかむと、玄関も砂利道も正門も構わず一目散に逃げ出した。ちょうど通りかかった自転車が、飛び出してきた彼を避けようとして生垣に突っ込んだ。

「やあ、帰ったよ」白いマッキントッシュコートを手にしたサプルトン氏は窓枠をまたぎながら、「いや、かなり泥まみれになったけど、ほとんど乾いてるってば。ところで、いま出ていった人はなんだい？」

「おかしな方なのよ。ナトルさんとかおっしゃるのだけど」サプルトン夫人が答えた。「ご自分の病気のことしか話さないし、あなたがお帰りになったと思ったら、さよならもなにも言わず走って行って。まるで幽霊でも見たみたい」

「きっと犬のせいだわ」

姪は静かに言った。

「むかし犬にひどい目にあわされたとおっしゃっていたの。ガンジスの岸辺にあるどこかの霊園で野犬の群れに襲われたんですって。新しく掘られていた墓穴のなかに逃げ込んで、犬が唸ったり歯を剥いたり泡を吹いたりするのを聞きながら一晩過ごしたそうよ。それ以来すっかり参ってしまったって」

作り話は彼女の得意技なのだ。